

「非ジェンダー的時期」としての高齢期を 再考する

——青森県大間町における高齢自営漁師らの出漁実践に着目して

島田有紗*

<要旨>

本稿では、青森県大間町大間地区における高齢漁師を対象に、彼らの出漁実践をジェンダーの視点から分析・考察する。本稿の目的は2つある。第一の目的は出漁実践の分析を通じて、これまでジェンダーやセクシュアリティとは隔絶した時期と見なされてきた高齢期を再考することである。第二の目的は、世界的に高齢者人口の増加が進むなかで漁民社会を捉える際の新たな視点として、高齢期への視座を提案することである。

先行研究において、漁民社会の老年は、年齢階梯制や敬老思想などの伝統的慣習への言及のなかで触れられるか、あるいはその社会的周辺性に由来する霊性・神聖性を取り上げる観念論のなかで論じられてきた。しかしこうした視点からは、実際の社会のなかで役割・立場を持って生きる老年の実態や、老年に関する伝統的慣習が現代の社会変動に晒されるという側面が見過ごされてきた。このような老年の実態を捉える際、ジェンダーというテーマに着目することは有益である。これまでの老年研究は高齢期や高齢者、加齢について学際的視点から究明を行ってきたが、高齢期のジェンダーやセクシュアリティはテーマとして忌避されてきた。なかでも高齢男性の性や生活はほとんど議論の対象にならず、高齢男性はジェンダーのない存在、すなわち非ジェンダー的存在とされてきた。David Jackson は労働者階級の高齢男性を対象に、彼らの身体が加齢によって衰えるなか、彼らが自身のジェンダーについて葛藤を抱えながら生活する実態を記述し、非ジェンダー的存在としての高齢男性の従来認識を批判した [Jackson 2016]。

本稿では以上の点を踏まえ、漁船・漁具のハイテク化や気候変動による漁場の移動といった近代的变化や、加齢による衰えという身体的変化に直面しながらも、海へと出続ける高齢漁師たちの出漁実践を検討する。その検討を通して、現代の漁民社会における高齢漁師の立場・役割や彼らの生の経験と思考・感情について明らかにする。そして非ジェンダー的存在としての高齢男性の従来認識を相対化する。

キーワード：老い、高齢期、ジェンダー、労働と仕事、漁業

*SHIMADA Arisa 京都大学大学院人間・環境学研究科 shimada1992@gmail.com

1 日本の漁民社会と老年について

これまで日本の漁民社会における老年を捉えてきたのは、老年民俗学であった。

民俗学で老年が対象とされるのは早く、古くは柳田國男や折口信夫による老人論がその研究潮流の初期に見出せる〔柳田 1990(1931); 折口 1975(1928)〕。この時期の老人論では、神仏信仰との関連や老いの両義性などが論じられ、老人を通した祖先信仰の理解が重視された。その後も老年は対象とされ、他世代に対する老年の周辺の性質に由来する霊性・神聖性が焦点とされた。こうした観念論中心の議論は 1980 年代まで続いた。関沢まゆみはそうした初期から 80 年代までの傾向としてイメージ偏向の老人観が先行し、実際に生きる老人やその生活が対象とされ始めたのは 90 年代以降であると整理する〔関沢 2006〕。

ただし、80 年代以前の老年研究にあっても、宮本常一は西日本を中心に農山漁村を歩き、土着の老人たちの生活史や寄り合いの模様、老年に与えられる暗黙裡な調停役割など村々のこまかな風俗について聞き書きを記している。そうした記述では漁業を生業とする土地において特に顕著に見える慣習として年齢階梯制が考察されつつ、そこに生きる老年の姿も捉えられていた〔宮本 1967: 59-61, 1984, 2015: 193-200〕。それまでの老年研究では「老い」の両義性や社会的周辺性に由来する神聖性ばかりが焦点されていたのに対して、宮本の仕事は、老年の立場・役割を他世代との関係内で捉え、個別の生活史を聞き書きしたという点で、当時の老年民俗学の潮流のなかでは画期的だったといえる¹。

中野泰の整理によると、漁業民俗研究でも漁場の継承や漁具漁法の知識・技術の伝達など生業内容に関連する資源や知識・技術管理の性向から、年齢階梯制や敬老思想は取り上げられてきた。しかし中野は、そうした学問的視座が高齢人口の増加し始めた状況の理解と対処を求める社会的要請に影響を受け、旧来の慣習や思想を理想化してきたことを指摘する。加えてそうした視座に内在する歴史的社会的変化の取りこぼしを批判し、近代化や思想の変化などの文脈のなかに年齢階梯制や敬老思想を位置づけ、現在の実態を理解すべきと述べる〔中野 2001〕。

中野の指摘と同様、筆者による青森県大間町大間地区でのおよそ 12 ヶ月にわたる調査でも、漁場環境から漁船・漁具などに至る環境面の変化、それに伴う漁業従事者らの世代間の関係性の変化が観察された。年齢階梯制に基づく慣習としての、高齢漁師に対する敬老の態度やその地位の保証も、絶対的なものではなくなりつつあった。

このような観察から、現代の漁業社会は経済・社会環境の面で変化に晒されており、漁法や漁業形態など生業面での変化のほか、年代構成や世代間関係も変わりつつあると考えられる。こうした変化のなかでは老年者の立場や役割も固定的であり続けるとは考え難く、社会的な動態と合わせて、高齢漁師の実際のあり方を把握していくことが重要である。ま

1 伝統的慣習や文物の記録に限らず、土地や生活に根差した風俗を生きる人に注意する宮本の視座は、漁業民俗学にも向けられた。漁具・漁船の形状や分類、変遷など民具の記録・収集が主な研究手法であったそれまでの漁業民俗学に対し、宮本は海辺で生きる人々の生活や政治権力主導の定住化政策への対処、定住化の過程を記述した〔宮本 2015〕。

た、医療技術や漁船・漁具の発展の結果、従来であれば引退していた年代でも、漁業に従事する人は増え始めている。そのため外部からの影響を受けた社会変化を捉える際にも、住民を均質なものとするのではなく、高齢層も含めた年代の相違に着目して考える必要がある。

以上の問題関心に基づいて、次の作業を行うことを本稿の目的の1つとする。まず漁民社会における現代の文脈を踏まえつつ、老年を取りまく環境はいかに変化し、また老年者自身はその状況をどのように生きているかを詳細に報告する。さらに、その作業を通して、経済・社会環境の面で外部から影響を受けた一漁民社会における変化を、世代的立場の違いに注意して検討する。

2 高齢化時代の漁民社会を理解するにあたって

2-1 高齢世代を含む年代的視座の設定

航海技術や海上交易、船員生活などを主対象とした海洋人類学は、人類学へのフェミニズムやジェンダー論の波及から、1980年代には漁民社会における女性の地位・役割に焦点を移し始めた。海洋人類学における女性研究は、従来の村落コミュニティを分析の中心に置いたものと異なり、微視的分析や歴史的検討を含みつつ、漁業と社会経済の特殊性との関係のなかに女性の地位・役割を位置づけることで、それまでの研究には見られない視点を生んだ [高桑 1994]。しかしこうしたジェンダー的関心は主要な漁業活動を担う年代に焦点化し [高桑 2004; 三田 2015]、近代的变化を経る現在の漁民社会を生きる高齢世代の実態は、ほぼその射程外に置かれてきたと考える²。

本稿の諸事例が収集された大間は半数以上の世帯が漁業を営む漁師町である。近年では年を追って若年労働力層が外部流出し、地区漁業者の約5割が65歳以上の高齢従事者に担われる形で高齢化が進んでいる。こうした状況は大間に限らず全国的に見られ、漁業の高齢化は深刻化している [山下編 2015a, 2015b]。さらに、同様の状況は台湾・韓国でも見られており [下田 2015]、少なくともアジア圏の漁業社会の一部では広く高齢化が進んでいると考えられる。このような高齢化状況を踏まえると、漁民社会内の世代的な経験の相違に注意する必要があるのではないだろうか。

中野は漁業民俗学の近年までの研究動向について、人類学の視点も交えながら検討し、問題点と課題を4つのトピックに整理した。そのうち知識・技能の研究トピックでは³、技術の進歩による労働環境の変化や、それに対する主体の適応態、個人と集団間での知識の動態が特に問題化される。そこでは個人主体の能動性が高く評価される一方で、それを可能とする条件や要因の考慮は不足している。そして中野は、その構築的性格の検討と歴

2 民俗学領域でも漁民社会の女性は対象とされた。しかし先の老年研究と同じで、祭りや俗信での霊的優位性を指摘するものが多く [高桑 1994]、その生活における実態を描いてきたとは言い難い。

3 中野はこの他に、漁民社会研究、サブシステム研究、資源利用研究を加えて4つのトピックを扱う [中野 2010]。

史的過程への位置づけの必要性を指摘する [中野 2010]。

技術の進歩による漁業環境の変化、それに対する漁民集団の適応態を見る上で能動的／非能動的といった傾向の違いやその構築を検討する際、世代的な経験の相違へ着眼することで、その実態をよりくわしく把握することが出来る。共時的状況を捉える視点がくわしいものとなれば、歴史的過程へ位置づける上でもより複眼的理解が可能である。

2-2 「非ジェンダー的時期」としての高齢期の再考

そもそも漁民社会を理解する上でのジェンダーの視点から、高齢期はなぜ排されてきたのか。

栗原彬が「老人は（中略）性と労働においてはものの役に立たない（中略）非生産者である」と述べるように [栗原 1986:19]、一般に高齢期とは働くことから遠ざかる時期であるのに加え、性欲や性別意識といった生産的活動と隔たった年代とされてきた⁴。また加齢や高齢期に関する老年研究においても、高齢者のジェンダーやセクシュアリティはテーマとしてしばしば忌避されてきた [Hori 2011]。こうした一般認識や学術的議論の場における、高齢期のジェンダーやセクシュアリティといった性的側面への批判・忌避が背景となって、先のジェンダーを切り口とする漁民社会研究の視点からも高齢期は除外されてきたと推測する。

しかし世界的な高齢者人口の増加に伴い高齢者の QOL の向上やライフスタイルの見直しなど福祉的関心が高まるなか、高齢期をジェンダーやセクシュアリティとは無関係な時期とするステレオタイプからの高齢者自身の解放が重視されつつある [Moore 2015]。そうした老年研究の展開のなか、フェミニズムの影響から高齢女性を対象とする研究は進展した一方、男性と男性性、加齢は焦点化されることがほぼなく、高齢男性はジェンダーのない、非ジェンダー化された存在と見なされてきている [Jackson 2016]。

同様の批判意識から David Jackson は、イギリス中東部に生きる労働者階級の男性を対象に調査した。そのなかで彼らの身体の衰えと男性性の揺らぎに焦点をあて、衰える身体による生活のなかで多くの高齢男性が葛藤を抱える実態を明らかにし、高齢男性はジェンダー意識を強く維持し続ける、ジェンダー的存在であることを示した [Jackson 2016]。

先に示したように大間漁業はその従事者が年次減少するなか、約 5 割が高齢者となり、高齢化が進んでいた。医療の進展や漁船・漁具の近代化によってこれまでなら引退していた年代でも従事する人が増加している状況にあり、こうした変化のなかで高齢者、特に男性漁師の役割・立場にも変化が生じていた。そして彼らとの共同生活を含む筆者の調査のなかでは、男性ジェンダー意識やその維持の意思が観察された。こうした調査中の観察に基づき、本稿ではこれまでジェンダー意識とは隔絶された時期と見なされてきた高齢期を、高齢漁師のジェンダー意識の実態解明を通して再考することを 2 つ目の目的とする。なかでも非ジェンダー化されてきた高齢男性のジェンダー意識を中心に記述し、その詳し

4 老年期の性欲や性別意識は批判対象とされながら、他方ではその保持の重要性も認められてきた [大工原 1979, 1991]。

い実態の報告を目指す。

そしてその際の分析視座は、身体性に置く。Jackson が対象とした労働者階級の男性と同じく、本稿の主対象とする漁師たちもまた高度な身体運用が要される生業が基盤となる社会に生き、その身体の衰えとジェンダー意識の関連は強いと考えるためである。

なおここまで民俗学を含む老年研究上の対象を指すために「老年」、ジェンダー研究や人類学研究上の対象を指すために「高齢者」の語を、それぞれの領域における議論を整理・批判する際に使用してきた。次の調査地概要以降の章では、対象となる 65 歳以上の人々を指すのに、「高齢者」あるいは「高齢漁師」の語を使用する。

3 調査地概要——過疎高齢化する大間と近代化する地区漁業

3-1 老いる漁師町「大間」

ここでは本稿の背景となる青森県大間町大間地区、および地区漁業の概況を示す。

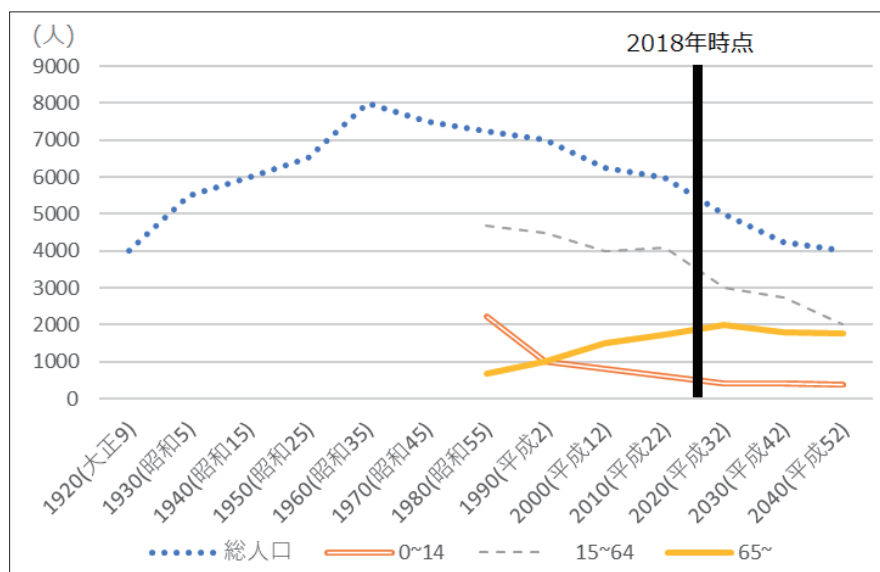
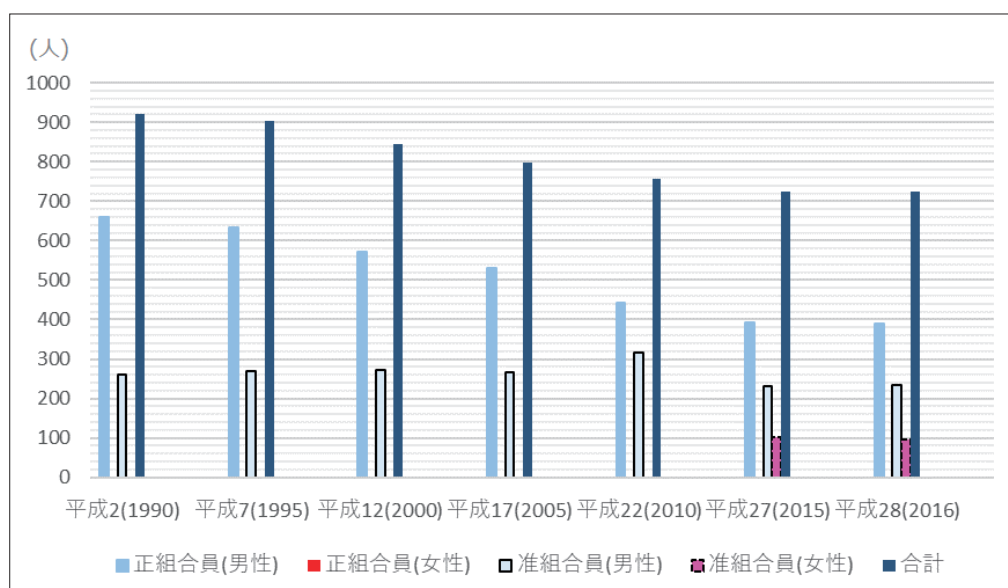
青森県大間町は本州の最北端に位置する。総面積は 52.1km²、うち 70% 以上を山林が占め、残り約 25% は段丘上に拓かれた田畑と点在する原野が占める。天然ヒバが豊富だが、80% が国有林で、残りの私有林もまた他業種との兼営で管理されている。それも財産所有の意味が強く商業利用はされていない。ヒバは藩政期に南部藩の財源とされ、「御山」「留山」として厳重な公的管理下へと置かれ、以降も公有は継続され現在の状態に至る。農業についても地味が痩せがちであることや夏場の冷害もあって当地では本格的な経営はされなかった。そのため当地では漁業、あるいは出稼ぎで生計を立てることがかねてより一般的であった [大間町 1997:407-489]。近年では原子力発電所の誘致に関連し、建設業や卸売業・小売業や飲食サービス業が参入、施設従業員による利用を見込んだ大型販売施設や飲食店が乱立した。それらは町の雇用創出に通じた。現在の大間町の財政的安定はこうした施設誘致に伴う交付金・補償金の給付、雇用創出によって達成されている側面が強いと考えられる。しかし原発の存続に慎重な議論が求められる今、施設による利益ばかりを頼みにし続けることは困難になりつつある。

こうした背景から当地は進学・就職を理由とする若年人口の流出が進み、同時に高齢化も深刻化している⁵。図 1 は町編纂の人口政策関連誌に基づいて作成した年齢 3 区分別の人口推移のグラフである。

これを見ると年少人口、生産年齢人口とも減少している一方、65 歳以上人口は増加しているのが分かる⁶。

このように町全体が高齢化に見舞われるなかで、町の主生業である漁業もまた高齢化している⁷。次に示すのは、大間地区の漁業を管理する大間漁協編纂の業務報告書から作成した、漁業従事者の変遷グラフである (図 2)。

5 2000 年には老年人口が若年・中年の人口を上回り、2040 年には老年人口が全体に占める割合は 40% を超すと推計されている。

図1 大間町年齢3区分別の人口推移 (2016) ⁸図2 大間漁協漁業従事者の変遷 ⁹

6 町の公式ホームページによると、2018年8月31日時点での人口状況は、総人口5,387人、うち男性2,761人、女性2,621人。世帯数は2,530世帯となっている（青森県大間町公式ホームページ <http://www.town.ooma.lg.jp/>、最終閲覧日2018年9月28日）。こうしたなかで高齢独居世帯は全世帯の約10%を占め、その増加は今後も予想される。

7 町は大間地区と奥戸地区の2地区から成るが、本稿では主に調査を行った大間地区に限定している。

8 『平成28年度版大間町まち・ひと・しごと創生人口ビジョン』より作成。

9 大間漁協1990-2016『業務報告書』より作成。

これを見ると、全体の従事者数が減少しているのが分かる。また正組合員と准組合員比率も逆転に近付いている。漁協は組合定款において、年間90日を超える操業を正組合員の条件として定めている。たとえ本籍を地区内に置き出資金を納めていたとしても、操業日数が規定に届かなくなれば准組合員となる。かつて正組合員だった漁業者の高齢化に伴う出漁日数の減少から、現在は准組合員の割合が増加し始めているのだ。

また漁協で平成28(2016)年度名簿を確認したところ、65歳以上の組合員は大間漁協724名中で394名、5割以上が高齢層によって占められていた。大間漁業の過疎高齢化と高齢漁業者の基幹化は顕著であった。なお本稿では65歳以上を高齢、40～50代を中堅、10～30代を若手とする。中堅や若手の区分は本来なら熟練の程度による。しかし漁師としての熟練の程度は、個人的経験やそれに基づく知識・技術に加え、運やセンスも重要となる。ただ経験を積みれば成果が出るとは言えないため、若くして中堅と見られる場合もあり、適当な区分でないとも言える。しかし、本稿では高齢者に焦点を当てるため、年齢を一応の区分とする。

3-2 大間漁業の主要生産種と漁法について

漁業における近代的变化を見る前に、現在の大間漁業を支える主要生産種と漁場・漁法を簡単に紹介する。

全国的にも「マグロの町」として知られるように、大間の漁業における主要漁獲種は

マグロである。しかし、マグロが主となり始めたのは1990年代以降で、90年代より前はコンブ・イカ・サメ・ウニ・タコなどが漁獲の多くを占めていた。また町史にも、80年代の当地漁業の主要漁獲種は一貫してコンブであり、総漁獲量の5割から7割を占めるほどで、量としては抜群に多かったと記録されている[大間町 1997:476-477]。マグロ人気の陰に隠れるそれらは近年の気候変動で姿を減らす魚種もあるが、現在も重要な水産物であり続けている。筆者による調査のなかでも、マグロやイカなど回遊魚・根魚を対象とする沿岸釣り漁、もしくはアワビやコンブなど魚貝・藻類を対象とする磯漁へ二分しているのが観察さ

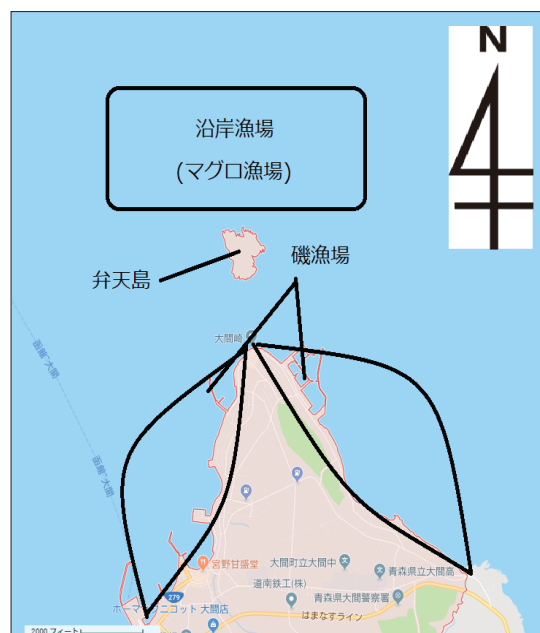


図3 沿岸(マグロ)漁場および磯漁場の位置(Google Mapより作成)¹⁰

10 沿岸(マグロ)漁場および磯漁場の位置。地区漁業の概要把握の便宜を図り、沿岸漁場は沿岸漁種のなかでも特に中心に位置づけられるマグロ漁場に絞って示した。Google Mapより作成。

れた。

漁場は津軽海峡に位置し、マグロなど根魚・回遊魚を対象とする場合の漁場は大間崎の先に浮かぶ弁天島から北へ2～2.5マイル沖に進んだ海域が主とされている。魚貝・藻類の漁場については、大間崎を中心に東西沿岸部にかけて広がっている。図3はその大まかな位置を示したものである。

次に漁法であるが、沿岸漁の場合は魚種によって漁法が異なり、手法数も非常に多い。ここでは当地漁業を代表するマグロに絞って一本釣り漁法と延縄漁法を沿岸漁法として紹介する。磯漁の場合は沿岸と沖合によって使用する漁具が異なるのみで、基本漁法は採集である。そのため漁具の違いに即してホコ漁法とマンケ漁法を紹介する。

まず一本釣り漁法は、餌によって生餌漁、死に餌漁、疑似餌漁とある。それぞれテグスの設置法や長さ、マグロとの距離の取り方が異なるが、基本的にマグロの群れの目前に出て、餌を差し出すように行う。餌はイカが主流となる。延縄漁法は、はえ縄、エサ縄、浮きが基本道具となる。1kmほどのはえ縄に50m間隔でエサ縄が結ばれる¹¹。浅い漁場での漁では、はえ縄が弛まないように2つもしくは3つ間隔で浮きが結ばれる。エサ縄自体の長さは15mが基本とされ、餌は生餌イカが主流である。こうした仕掛けを潮流に沿って流すように設置し、引き上げる動作を繰り返して漁が行われる。

磯漁を見る。ホコ漁は主に地先20m内、水深10m前後の浜近くで行う。比較的に海流は緩やかで水深も浅いため1トン、あるいはそれに満たない小型の漁船（当地では「イソブネ（磯船）」と呼ばれる）でも出漁が可能となる。使用するホコは7m程度の木製、あるいはアルミ製の棒で、先端が二股に分かれる。箱メガネから海底をのぞき見、二股に分かれた部分を差し込み、海底の藻類を掘り取る。手動のため小回りが利く一方で力の限界もあり、水深が10m以上になると水の重さや海底の水流に負けて操れなくなるため、浅い海域でのみ使用できる漁具と言える。

マンケ漁は地先20mより沖、水深20～30mのより沖合で取る漁法である。浜から距離があり、水深も深く海流も激しくなるため、操業には1トン以上の漁船重量が必要になる。マンケは鉄製の四本爪のものが使用される。鉛の入ったロープをマンケ上部に括りつけ、海底を引きずって使用する。海底には藻類ばかりでなく溝や岩礁なども存在し、それら障害物に掛かると船が転覆する場合もある。そうした危険を避けるためにも漁船は大型のものが望まれる。一方を引き上げる時、船を止めないで済むように別のマンケを投げ入れるため、2つ一緒に使用されるのが一般的である。

3-3 近代的变化を経る大間漁業

大間はコンブやウニなど、魚貝・藻類を主要漁獲物とする漁師町であった。しかし90年代以降はクロマグロが漁獲され始める。戦後以来のマグロ生食ブームや冷凍保存・輸送技術、幹線道路の整備の進展、ブランド化などが重なり、当地は魚貝・藻類を主要漁獲物とする北端の一漁師町から一躍「マグロの町」として全国的に知名度を上げ

11 規模が大きい場合は最大で2kmにもなる。

た¹²。そして高級食材としてマグロ自体の単価が高かったことや土地ブランディングの成功を背景に、マグロという限られた資源を誰よりも早く獲得し、誰よりも良い品質で商品とすることが地区のマグロ漁師間で志向されることとなった。

こうした漁獲種の変化や、町の社会的側面と経済的側面の変化は、出漁で用いられる漁具・漁船にも影響した。少しでも気候の影響を受けにくく、出漁の可能性を高くするとともに、より長期の航海に耐えることが可能になるよう漁船は大型化した。

基本的に4トン以上の中・大型漁船がマグロやイカを対象とした漁で使用され、4トンに満たない小型漁船が採藻漁やウニなど磯物を対象とした漁に使用される。近年では4トン以上の漁船の比率が一定あるいは増加する一方、4トンに満たない小型漁船は比率を減らしている。また船体が大きいほど揺れや打ち付けの衝撃は小さくなるため、海上作業への支障を減らすことも出来る。

こうした漁船の大型化に加え、搭載される設備もハイテク化が進む。現在の漁船に一般に搭載される4大設備としてGPS、レーダー、魚群探知機、ソナーがある。GPSは自身の船の位置把握に用いる。レーダーは他船との相対的位置の把握に必要となる。魚群探知機は魚群位置

の把握を可能にし、海底地形を知る上で重要である。ソナーは魚群探知機と同様、魚群位置の把握に用いられるが、前者が船の真下を範囲とする一方、後者は船の周辺含めより広範囲の探知が出来る。こうした可視範囲の違いから、魚群探知機とソナーは相補的に用いられる。こうした設備の他、電気ショッカーやホーラー¹³、水温計など様々な設備が個々のマグロ漁師によってその手法に合わせ選択・投資されていた¹⁴。

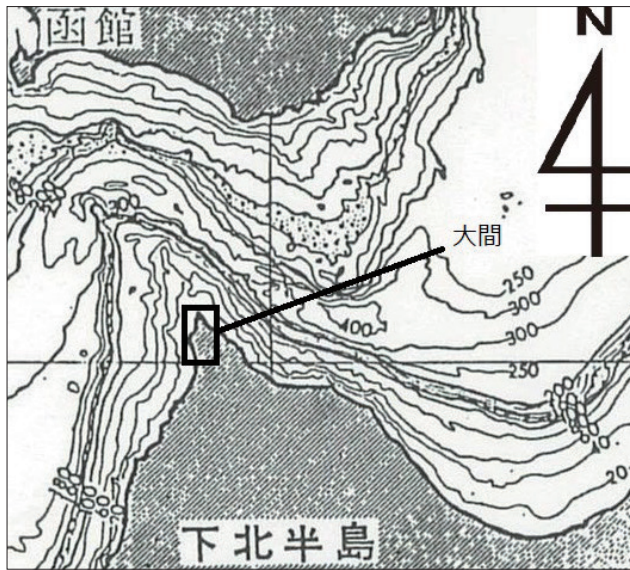


図4 沿津軽海峡の深度図¹⁵

12 2007年に大間漁協による出願で「大間まぐろ」が地域団体登録商標となった。町の公式ホームページを見ても、漁獲されるマグロを守り、またそれによる町の成長および更なる魅力の創出を目指す「大間・まぐろ町宣言」が出されている（青森県大間町公式ホームページ <http://www.town.ooma.lg.jp/>、最終閲覧 2018/9/28）。

13 電気ショッカーはテグスにかかった獲物を引き上げる際、電気ショックを与えてとどめを刺すために用いられる。これにより、かつて獲物が弱り切るまでにかかっていた数時間が短縮され、またテグスを操る漁師自身の体力消耗も軽減されることになった。ホーラーとはテグスを巻き取る装置である。獲物を船上に引き上げたり、引き寄せたりするために用いる。獲物とするマグロの多くが数十キロを越すため、不安定な船上での引上げ作業もまた体力が要される。ホーラーによってそうした負担が軽減された。

14 個人の漁師が使用する機器については、メーカーや型番、設置位置も公開することは止められた。これは漁の効率化だけでなく同じ対象を狙う漁師との差別化を目指して投資されていたからだ。

15 大間町 1997『大間町史』より参照。

また漁場環境にも変化は生じていた。近年は大間の地区漁場が位置する津軽海峡の海水温が上昇を続け、その影響で漁場の植生が変化し始めていた。図4は津軽海峡一帯の深度を等高線で示した図である。

大間を中心に東西に分けると、西側海域は等高線の間隔が広く緩やかに傾斜する一方、東側海域は等高線の間隔が狭く急峻な傾斜のあるのが分かる。つまり西は東よりも浅く、同じ日照時間でも海水が温まりやすい。こうした地形的条件と近年の海水温上昇から、東西で藻類の分布に偏りが生まれた。具体的には大間で採集される主要な藻類として「マコンブ」と「アラメコンブ」があり、マコンブは深度10m前後域、アラメコンブは深度20m～30m前後域にそれぞれ生植していた。これらのコンブは水温が24℃を超すと成長を止める性質を持ち、近年水温が上がったことで、西側海域では両種ともほとんど採集出来なくなってしまったのである。高い水温で成長が促進される「ツルアラメ」が増殖したことも、もともとあったコンブの生植を妨げる要素となっている。

こうした漁場環境と植生の変化の結果、コンブなどを獲物とする漁師たちは東側のより深い海域へと漁場を移動させた。

4 大間における漁民的職能の意味づけ——「漁師」に見る男らしさ

4-1 海の男と陸の女

従事者の高齢化や漁船・漁具のハイテク化、漁場環境の変化などに見舞われる大間漁業の概況を見た。ここからはさらに当地内の文脈に踏み込み、漁業に従事する漁民の意味づけを記述する。

地理気候的条件から大間では漁業が主生業であった。また地区漁場が位置する津軽海峡は海流が激しく、海底地形も入り組んでいることで潮流も複雑である[大間町1997]。さらに年間を通して気温は比較的に低く、冬季ともなれば町は大雪に閉ざされる程に寒冷となる。そうした環境的要因もあり、家計を支える重要な主軸であっても女性の漁業への従事はほとんど見られず、もっぱら男性が従事してきた。無論全く見られないわけでない。

コンブやウニなどの魚貝・藻類を対象とした漁、あるいは危険の少ない乾燥・裁断作業ならば、女性の従事も見られる。しかし、女性はあくまで男性の補助として位置づけられ、漁行為や海という場からは切り離されていた。

海に合わせて漁に出る漁師男性に対して、女性はそうした男性の出漁に合わせて炊事洗濯などの家事を担当することが役割として求められる。次の事例は当地でブリ釣り、採貝漁を主とする漁師の妻S・Yの平均的な一日の過ごし方、および当地での漁師男性と妻女性の役割に関する語りの一部である。

事例1 海では男、陸では女(2017/9/20)

S・Yは、ブリ釣り、採貝漁を主とする漁師の妻だ。季節によって変動はあるが、毎日の過ごし方はほとんど決まっており、ほぼ毎朝7時前後には朝食と弁当を用意して夫を漁

に送り出し、続けて子どもたちを学校へ出す。その後は夫の電話を待ちながら家事をして過ごし、夕方18時頃に連絡が来るとそれに合わせて食事の用意をして、子どもの世話をしながら帰りを待つ。また竜神祭や地蔵祭など行事に際しては¹⁶、欠席のないようスケジュールを調整し服装や供物の手配なども行う¹⁷。

以下は当地における漁師男性とその妻の関係性についてのS・Yの語りである。

S・Y：…基本的には海では男、陸では女だね。(中略)することって言えば、竜神や地蔵祭なんかに参加できるようにしたり、常に現役でいられるように健康管理したり。(中略)漁師って海に出る仕事で激しいから、女の人がいないと生活が成り立たない。(中略)成り立たない場合は別れるんじゃないかな…。

このように女性には漁師男性が現役の漁師として活動し続けられるように陸での生活を支えることが役割として求められる。漁師男性はこうした女性による補助的役割の遂行によって漁師としての活動を成立させているのである。

漁民社会をジェンダーの視点から捉える上では、こうした男女の役割区分の実態について、より詳細に検討する必要がある。しかし本稿の目的は高齢期における男性のジェンダー意識の実態解明であることから、ここではひとまず海や漁民的職能と男性ジェンダーとの結びつきを示すため、その対比として女性の役割や男性ジェンダーとの相関に触れる程度で留める。

153

4-2 「漁師」と重ねられる男性ジェンダー

それでは男性ジェンダーと結びつく漁民的職能とは、具体的にどのような内容なのか。ここではその内容について詳しく検討する。

高桑守史は漁民の気質を、漁村社会の個人的競争原理、投機的性格に見ることが出来ると指摘する[高桑1989]。そのような気質に加え、実際の活動も身体的負荷の大きな海上作業に耐えられるだけの頑強な身体や、潮流や獲物の動向を追い、絶えず訪れるそれらの変化を正確に認識する認知能力が要されることから、男性による従事が圧倒的に多い。そうした生業に基礎づけられる社会もまた、多くは男性中心的な社会となる[高桑1994]。

高桑の言う個人的競争原理や投機的性格は、当地の漁師たちにも広く見出される性質で

16 行事は通年見られるが、節分や彼岸など全国に見られる行事の他、地蔵祭や竜神祭など豊漁・海上安全祈願を目的とした漁業関連の行事も目立ち、漁業が当地生業として重要な位置を占め続けていることが窺えた。

17 いずれの催事も豊漁、海上安全の祈願と感謝を目的に行われるが、主役は漁師男性に担われる一方で女性たちは裏方に回る。具体的に述べると、それぞれの祭事では祭神への供物や祈祷後の直会のための食事や配膳が必要になるが、女性はその準備などに徹してほとんど表には出てこない。たとえば、大漁祈願祭では宵宮に当たる前日には、神社本殿で漁師たちの祈祷が行われる。その祈祷が終われば直会となり共食に移るが、それらの手配をするのは漁師の妻たちの有志で結成される女性部会の会員である。また共食の時間になっても本殿は漁師たちだけで埋まり、女性たちは裏手の調理場で待機している。同様の光景は竜神祭でも見られた。こうした海や漁に関するものと女性の分離の認識、実践は性別、年代問わずに確認された。

あった。彼らは漁のなかでどの漁場や漁具、漁法が有効であるかは基本的に誰にも教えず、個人で試行錯誤を繰り返し独自のノウハウを構築する。その上で他の漁師たちと競合し、勝つことを好んでいた。またそうした勝負は漁の成果によって付けられるが、漁は海やその時の天候、風向き、潮流、獲物の動向など多くの変数によって構成されており、結果は常に保証されず、不安定である。一般的に、生活の基盤となる収入獲得の手段にはある程度の安定性が求められると考えられるが、むしろそうした不安定さゆえに楽しみを見出す様子も、参与観察のなかでは見られた。

そしてこうした気質はただ漁民的であるというだけでなく、当地における「男性」のジェンダーモデルとも見なされていた。次に示すのは、インフォーマントとなった採貝漁師 T・K が学校卒業後に漁師となるまでの経緯である。数度にわたるインタビューに基づいて再構成したライフ・ヒストリーから抜粋した。再構成に際して、元となるインタビューデータの収集された日に飛びがある。そのため、元データの収集された日付は記さない。

事例 2 男は漁師になる以外認めない

T・K は大正期に漁家に生まれ、兵役も経験していた。インタビューに応じてくれたなかで最高齢だったが（調査当時 91 歳）、振る舞いは軽快で、若い時期の記憶も明瞭だった。

学校の授業より親の手伝いを優先させる環境で育ち、小学校高等科まで進んだが、卒業する 15 歳になると彼は進路に悩んだ。理由は当時まだ漁業共済がなく、不漁でも補償がなかったためだ。その不安定さに加え、優秀な生徒だった彼は役場や警察等から勧誘があった。そんな経緯から彼自身は漁師を好まず、むしろ安定した収入がある役所仕事に惹かれたと語った。しかし漁師だった父が「男は漁師になる以外認めない」と譲らず、渋る気持ちもあったが受け入れて漁師となった。以降は結婚し、出稼ぎとの二足の草鞋を履いて家庭を支え、現在に至っている。

T・K による職業選択時の思考は、彼が生きた当時の大間では別として、現在では一般的な考え方だろう。こうした将来の不安定さを含む漁師という職業の投機性と男性ジェンダーの結びつきは、現役世代の漁師によっても共有されていた。次の事例はマグロ漁船の乗り子の 20 歳代若手漁師 G・S へのインタビュー抜粋である。インタビュー時は G・S にくわえ同じく 20 歳代の若手漁師 I・S にも、学歴と将来の安定についての話を伺った。I・S もマグロ漁船の乗り子をしてしたが、G・S が中学を出てすぐ乗り子になったのに対し、I・S は高卒後に北海道の調理師専門学校へ進学、関東圏での飲食店勤務を経て乗り子となった。

事例 3 女だったら多分、高校行って、違う仕事してると思う (2017/8/23)

インタビュー中、学歴の話になる。中卒では今の時代ハイリスクだという I・S の発言

をうけ、G・Sもまた頷いて将来への不安を認めていた。そう考えながら、なぜ中学を出てすぐに漁師の道を選んだのかと疑問に思い、筆者が理由を尋ねると、G・Sは「夢だよ、夢。夢があるからやってみたい感じがだよ」と返された。

夢という言葉の曖昧さをより詳しく明らかにしたかったことやインタビュー当時すでに持っていたジェンダー意識への関心から、筆者が「そうした職業の選択は自身が男性であることとは関係していますか？」と続けると、彼は「絡んでると思う。(中略)女だったら多分、高校行って、違う仕事してると思う」と返答した。

T・Kの生活史やI・SとG・Sの会話からは、敢えて不安定を選択するのが望ましいとする投機性と、そうした性質の男性ジェンダーとの結びつけが共通して見出せる。他の要素である独立性や競合性については、これら事例からは確かに見出し辛い。しかし漁師として生きることは自身の力で他の漁師を出し抜き成果を上げ続ける日々を生きることと同義であり、当地で漁師としてあることを選択することは投機的であると同時に、独立性・競合性の求められる生活を受け入れるということでもあると言えよう。つまり漁師とは、日々の漁業実践から漁師としての生き方までを含めて、独立性や競合性、賭博性を特徴とする生業である。

そして「漁師としてある」という選択は、ただ「男」として生まれたという理由だけによって、むしろその性別であるからには必然の選択であるかのようにして当地ではなされていた。上記の事例に登場した3人に限らず、他の漁師へのインタビューや宴会時の会話でも、漁師としての選択が自身の性別に由来するものとする発言は聞かれた。

これら2つの事例は、当地において男性ジェンダーの理想形として漁師が想定されること、その結合がT・Kのような高齢世代からI・SとG・Sのような若手世代まで広く共有されていることを示している。T・Kは父親の言葉に従っただけで、そうした漁師と男性ジェンダーを結びつける認識を共有していたとは限らないという指摘もあるだろう。しかし彼は安定した仕事を望みはしても、渋りながら父親の言葉を受け入れていた。それは実際に生きていく上で何が適切かを考えるのとは別に、男性としていかに生きるべきかという理想について共有する部分があったからである。

5 近代的变化を経験する大間の漁師たち、その諸相について

5-1 近代的变化により加速する競合と変化する出漁

90年代のマグロの出現以降、大間では漁船の大型化と漁具のハイテク化が進んでいた。またそうした漁船・漁具の近代的变化は漁中の競合状況にも影響していた。次に示す事例4は、当地でマグロ漁を専門とする中堅世代の漁師K・Tの出漁に同行した際に記録した日記の一部である。事例は、漁船を案内してもらった際の様子と会話を中心に再構成したものである。

事例4 大間ブランドのなかでも上を目指している (2016/10/9)

この日は当地でもマグロ一本釣り漁の名手とされるK・Tの出漁に同行した。K・Tは自身の船を案内し、ブリッジの内部に搭載している計器類の使用目的や価格などについて詳細な説明をしてくれた。ブリッジとは操舵室を指す。

GPSやソナー、レーダーのような基本的設備に加えて、K・T個人が選別し設置した設備も見せてもらった。しかし具体的な設備の記録やその配列に至るまで、全ての情報の外部流出は避けるように厳しく止められた。どの計器類や設備を選び、どのように設置するかは、全てK・T自身が実際に漁へ出るなかで試行錯誤を繰り返して考え抜いたものだからである。

こうした投資は効率的な漁獲に加え、できる限りマグロを良い品質の商品にするという目的の下で行われていた。K・Tが「うちは大間ブランドのなかでも上のほう目指してるから」と話したことから、他の漁師よりも多くマグロを漁獲することはもちろん、そのなかでもより鮮度が高くかつ傷の少ない、業者が高く買い取る商品へと仕上げるのが重視されている様子が窺えた。

水揚げされたマグロは荷揚げ場に運ばれ地元か東京築地直属、あるいは地方都市圏の卸売店へと出荷される。その際は身体に傷が少なくまた鮮度の高いものが選別され、良いものから東京をはじめとする主要都市圏へと流通する。マグロを獲った漁師はマグロ自体の価格から漁協委託分と梱包・発送料金が差し引かれた分を手取りとして受け取るため、手取りを増やそうと思えば、セリで高額入札される可能性を少しでも上げる必要が生まれる。そこで彼らはマグロを釣り上げる際に用いられる漁具に配慮する。たとえば、マグロが食いつく餌をつなぐテグスや針なども、製品の選択によっては釣り上げる際に魚体に擦れたり引っかかりたりする危険を減らすことができる。また釣り上げた後の魚体の管理でも、水槽の大きさや水槽内の水温調整次第で鮮度は異なってくる。こうした設備に配慮することで漁獲されるマグロの品質は向上し、セリで高額入札される可能性も高くなる。継続して高品質のマグロを荷揚げできれば漁師個人の収益も上がり、大間ブランド内でも他の漁師との差異化に通じ、そうなればさらなる設備投資が目指されるようになっていく。このように漁船・漁具のハイテク化が進んだことから、K・Tの事例に見るような大間ブランド内でより高品質かつ多量のマグロの漁獲を目指す漁師間の競合は加速することとなった。

またこうした近代的变化は、以前ならば身体や認知能力の衰えからすでに引退していた高齢世代の漁中の負担を軽くし、従事の継続も可能にしていた。具体的には、魚群探知機の導入によってそれまで見えなかった水中の環境が可視化され、ソナーが導入されたことでより広い範囲で魚群を探し出すことが可能になった。これら魚群探知機やソナーの導入は漁業経験の浅い若手であっても熟練の漁師に並ぶ、あるいは追い越すほどに、素早く獲物を見つけ出すことを可能にさせた。

またショッカーやマグロ巻き取り機の導入によって、かつてなら食いついたマグロが弱

り切るまでにかかっていた部分が短縮され、引き上げる際の身体的な負担も軽減された。これは特に獲物との駆け引きや引き上げに要する体力の消耗が激しい高齢世代のパフォーマンスを向上させたという。ショッカーがない時代であればテグスを挟んだ獲物との格闘は4～5時間に及んでいた。その間は基本的に獲物から目が離せず、かなりの集中力が必要になる。またテグスが切れないように、海中を動き回る獲物に合わせ臨機応変にテグスを引いては離す微妙な調整も必須であった。相手は海中にいるので純粋な魚体の重量に海水の重みも加わるため、これには瞬発力だけでなく、強い足腰や腕力も要される。漁師の身体は若い時期から酷使されるため、加齢に伴った衰えも早い。衰えが始まって漁ができなくなる程度や時期は個人差があるが、こうしたショッカーやマグロ巻き取り機の導入は確実に漁師たちの引退を遅らせ、釣り漁、特に獲物との駆け引きが激しいマグロ漁師には歓迎されていた。つまり、こうした近代的变化を経た現在の漁環境は、かつてと比較すれば高齢漁師がより長く活動できる環境になりつつあるとも言える。

ただハイテク化するばかりでなく、伝統的漁労知識・技術との併用もあるようであった。たとえば、季節や時間帯、海底地形によって変動する潮流を捉えるのに長けた高齢層の知識・技術を元に、おおよそその魚群の位置をつきとめた後、その場所に向かってソナーで探索するという場合もあれば、逆にソナーで見つけた魚群に向けてはえ縄などの仕掛けを設置する時、仕掛けが海底の岩礁や溝に掛かってしまわないよう、その位置ごとの海底地形に関する知識を援用するといった場合もある。しかしそうした伝統的知識・技術を特に持つことで高齢層の役割や地位が優位になることはなかった。むしろ世代的な教育歴や生育環境の相違から、進み続けるハイテク化に乗り切れず、漁中も遅れを取るのが普通で、計器類を使いこなさず他世代と同様に成果を上げる高齢漁師は少数であった。

5-2 周辺化される高齢漁師たち

当地の高齢世代は、戦後の高度経済成長期の入口に小学校あるいは中学校を卒業し、就職を経験している。卒業してすぐに都市部、あるいは地元就職した世代の彼らは計器類のマニュアルにある英語を読解する知識を基本的に持たなかった。そうした世代に特有な教育背景もあり、高齢世代は他世代と比較して、近代的变化を経た漁環境では周辺に置かれていた。次に示す事例5には、そうした高齢世代側の様子が端的に表れている。採貝・採藻漁を営む高齢漁師O・Mと彼の妻O・Aを含めた会話の一部である。

事例5 年寄りとは分かんねえもの。(2016/9/13)

筆者：…技術とか漁具がちょっとずつ両方変わってるけど…機械に頼るか頼らないか、その度合いも違うんですね。

O・M：ぜんぜん違う。機械もの、機械を操るにも頭使うし、あの、年寄りとは分かんねえもの。何が書いてあるかすら分かんねえもの。

O・A：みんな日本語じゃないでしょ、あれ。ローマ字で書かざってるでしょ、機械全部…ローマ字だよな？

○・M：全部全部。

○・A：全部それだから、やっぱり年いった人つうのは使えないんだよ。あれ、きつとね、日本語で書かさってれば、ある程度使えるかもしれない。

○・M：でもあれ1年もやってれば分かるけどの…いや、ほいでもまだ年いってくれば忘れるんだよなあ…。

○・A：忘れるってみんな、なんだかんだ全然分かんねえんだで…若干ローマ字読んだりするけど、全然読めねえ人もいるんだから。

またこうした知識や読解力の問題を乗り越えても、高齢漁師の出漁には壁が残る。漁具のハイテク化と競合の加速が進むなか、多くの漁船がソナーを搭載し始めたことで特殊な状況が生じていた。

ソナーは水中の魚群を電波で把握し、その魚影をパネルに映す。しかしその際、周囲の漁船に搭載されるソナーの発する電波も拾い、パネルに反映させるようになったのである。そのため漁師たちはソナーで群れを追いかけると同時に、他の船の動向も注意しなくてはならなくなった。この場合、自分以外の乗組員を雇える漁船であればソナーの管理を頼むことができる。別の方法として、他の船が持つものより高性能なソナーを搭載すれば、そうした雑音を拾うことは避けられる。しかし高齢漁師にとっては、後継ぎがいる場合を除くと、使用する漁船規模が小さいことに加え、体力的な問題もあるので、乗組員を雇うほどの収益を得るのは難しくなる。とうぜん年々新たに開発されていく設備の更新や、改良のためのメンテナンスもそれほど頻繁に行えない。結果として、高齢漁師がソナー中に映った他の船影とマグロの魚影とを見分けられずに立ち往生し、時には他の船の進路を阻んでしまい、罵倒される場面も現在では頻繁にみられるようになっている。

次に示す事例6からは、そうした状況に置かれた高齢漁師の様子が窺える。マグロ漁に専門に活動する中堅漁師K・Mによって観察された漁中の様子に関する語りをもとにした事例である。標準語訳を後につける。

事例6 見分けがつかねえの、まあ何人かいるんだ、年いった人は。(2016/8/12)

K・M：船の持っていき方も、その人のまあ一つの考えもあるべし…ただ年いった人たちってのはソナーだけ付けてるんだけど、そういうの分かってねえ人もいるとこで、マグロがこっちに行っても、常にここから動かねえんだ。ま、いるんだよ、何人か。せば、こっちの人がこう向かっていくのに、ここさ居て動かねえもんだもん…で、こっちの人が今度は動けねえっきやな。で、こっちの人ばかり今度は次から次へと餌投げてくのに、この人1人のためにこった、わいどのはこった、こっちさいる人は投げれねえわけさ。…その動きがどうなっているかつうの、その雑音のなかで、わがねえのさ。…マグロとの見分けがつかねえの。…まあ何人かいるんだ、年いった人は…。

標準語訳：

船の移動のさせ方も、その人1人の考え方がある。ただ高齢の人たちというのは、ソナーを使用していても操作などが分からない人もいる。だからマグロが近付いても、立ち往生して動かない。そういう人は何人かはいる。そうすれば、他の漁師がマグロに向かっていくのに、高齢漁師が動かないのだから、向かっていった人が動けない。そうすると、高齢者に邪魔されない人はマグロに餌を投げられるのに、高齢漁師のせいで邪魔されて投げられない人も出てくる。…そうしたマグロと漁師の動きがどうなっているのかというのが、パネル内の雑音で分からない。マグロと船影の見分けが付けられない。そういう人が高齢漁師には何人かいる。

また海水温の上昇による漁場移動によっても、高齢漁師たちは困難な状況に置かれていた。先述のように近年は海峡の植生が変化したことで、コンブやウニなどを対象とする漁師たちはより沖へ漁場を移し始めていた。しかし沖に行くほど水深は高く波も荒いたため、身体の衰える高齢漁師にとって出漁は難しい。結果としてより沖でも活動できる若い世代だけが移動し、高齢世代は取り残されるという状況となっていた。

こうした状況において、高齢漁師たちは疎外的感覚を経験していた。次に示す事例は採貝・採藻漁を営むO・Mによる語りの抜粋である。インタビューでは90年代以降の漁船・漁具のハイテク化をはじめとする近代的変化のなかで、高齢漁師の置かれる立場や役割に生まれた変化について話された。調査中に観察された高齢漁師たちの疎外的感覚を端的に表す事例である。調査中に観察された高齢漁師たちの疎外的感覚を端的に表す事例である。標準語訳を後につける。

159

事例7 今はもう年寄りってなもう、今そっちのけだな。(2016/8/13)

O・M：…若い人は年寄りに「教えてくれ」と。じゃあ「おう」と教えてもらって、そうやって育ってきたんだもの。(中略) そしたら年寄りも、今度若い子たちと世話なることもあるし、マグロあげる時でもほら、力がないば船さ上げてもらうんだもの。(中略) 今はあまりそういうのはなくなった。新しい機器ができてから。(中略) 昔は、年寄りってのはの、若い者にの、大事にされたいの…昔、年寄りってな、大事な存在に…な、ちょっと高いところに、いるところにはいだったんだけど、今はもう年寄りってなもう、今そっちのけだな(中略) 年寄りってのはもう、退いた方が良くなって思ってるな…そっちのけ、のけの存在にいるんだ我々も。(中略) 色んな話し合いしても、皆意見が違うでしょ？(中略) お互いにこう意見のぶつかり合った時に「年寄りだからじゃあ退けるか」と。そういう感じだ、今は。

標準語訳：

若い人は年寄りに「漁の仕方を教えてくれ」と寄る。そうすれ高齢漁師も「おう」と応じるし、そうして育ってきた。(中略) そうすれば年寄りも、若い漁師のお世話になること

もある。マグロを船に引き上げる時でも、力が無ければ若い漁師に引き上げてもらう。(中略)今はそうした協力は無くなった。新しい計器類が出来てから。(中略)昔は、年寄りには若い漁師に大事にされたものだ…昔は年寄りってのは、大事な存在、少し高い地位にいることはいた。でも、今はもうそっちのけだ。(中略)年寄りってのはもう、中心から退いた方が良くも思ってる。…そっちのけにされる存在に、自分たち高齢漁師はいるんだ。(中略)色んな話し合いをしても、皆意見が違うことがあるでしょう？(中略)そうして互いに意見がぶつかり合った時に、「年寄りだから退くか」と。そういう感じなのだ、今は。

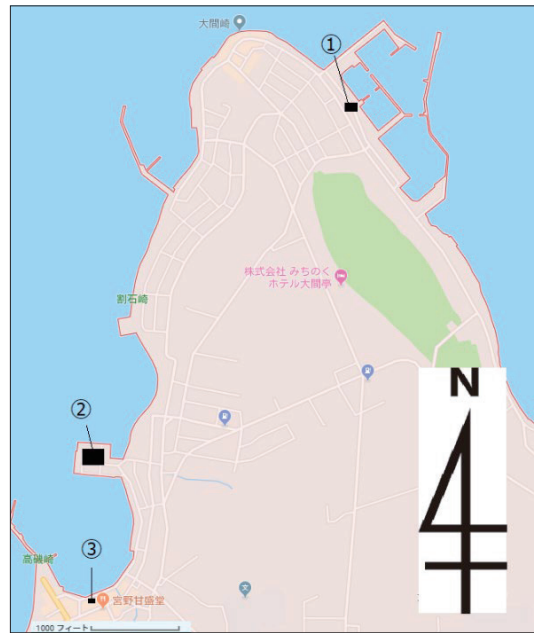


図5 大間のバンヤ位置²⁰

語りに、かつての高齢層と若手の関係性が窺える。身体が衰えても経験で培われた専門的知識や技術は消えない。そうした知識技術を次世代に伝える役割がかつて高齢世代には残されていたと推測する¹⁸。しかし機械化がそうした役割を補って若者から尊敬され続ける機会は減り、現在の高齢層はただ漁ができない存在と見なされるようになったのだ。

近代的变化を経る大間では高齢漁師の立場や役割も移ろっていた。その移ろいを実際に生きる高齢漁師たちは、自身の立場に微妙な思いを抱きながらも周辺に存在していた。

6 高齢漁師たちの出漁実践

6-1 継続される出漁と同世代漁師の共同体

近代的变化のなかで高齢漁師たちは周辺の立場に存在し、他世代に比較して疎外感覚を抱いていた。そうした状況にありながら、彼らは出漁を継続していた。ここでは、そのような彼らの出漁実践を検討する。

調査中、彼らの姿は「バンヤ（番屋）」や浜でよく見られた。バンヤとは漁具を片付けたり漁の合間に休んだりする漁師の作業小屋であるが、仲間の漁師たちと炊事宿泊する場ともなる。大間に3軒あるバンヤの位置は以下の図5の通りである。図中①のバンヤで主

18 こうした世代ごとの立場の変化と代替役割による補償は、古い漁民社会の様子を記録した民俗誌にも見えていた [宮本 1967, 1984, 2015]。

な聞き取り調査を行った¹⁹。

以下に示す事例8は、高齢の採貝・採藻漁師O・Mの出漁日を1日かけて追った記録である。そこでは先に紹介したバンヤ①が拠点となり、高齢漁師間の社交と共同集団が成立している様子が見出せる。

事例8 O・Mの1日(2016/11/15)

前日の悪天候が続き朝から雨だったが、O・Mは5:00頃浜へ出た。昨日あげ損ねた網をあげると、網外しをした。暫くすると男性が1人歩いてきた。O・Mの友人の漁師だった(以下ではO・Yと呼ぶ)。彼はこの日の天候からO・Mが心配になり、様子を見に来たと話すと網外しを手伝い始めた(写真①)。

普段なら2時間程かかる作業が、1時間半で終わった。お礼を貰ったO・Yは自身の船の修理に戻っていった。O・Mは獲物を分け、乾燥作業に一度帰宅する。干し終えたと浜

へ戻り、残りを荷揚げ場へ持ち込み帰宅した。すると間もなくO・Yが来て、何か話をして帰った。O・Yは娘が自分(=O・Y)の父の誕生日に帰省するらしく、嬉しそうだったとO・Mは笑った。

その後また浜へ戻り、次はバンヤへ向かった。バンヤにはまた別の友人H・Mがおり、その日の漁や天気の話をした²¹。途中でO・Mは貰い物のお酒をH・Mに譲り、H・Mはお返しに自身で獲ったブリを1匹O・Mに譲った。

これが本題だったらしく、その後O・Mは帰宅し、家の裏で先のブリを捌くとT・Mの家に向かった²²。T・Mもかつて採貝・採藻漁師だったが身体を壊して以降は漁も出られ



写真1 O・Mの網外し作業の様子²³

19 この他、大間漁協近くに1軒(②)、地元の菓子店である宮野甘盛堂の近くに1軒(③)のバンヤが位置している。それぞれの黒点の大きさは規模を表しており、漁協近くの②のバンヤが特に規模が大きく、利用する漁師の回転も速かった。聞き取りを行った①のバンヤが次に大きく、60歳代以上の高齢漁師の利用が主であった。そして③のバンヤは特に小さく、小屋があるだけで利用される場面は調査中にはほとんど見られなかった。

20 大間地区におけるバンヤの位置(Google Mapより作成)。

21 H・MはO・Mの同級生であり、彼らが集まるバンヤのもともとの持ち主だった。はじめは彼個人のバンヤであったが、そこに仲間の漁師がストーブや薪を持ち寄り、やがて漁師らが立ち寄る開放的なバンヤになったのだった。

ず妻と2人暮らしていた。以前から日常的に交流していたため、T・Mが食料の買い出しにも困っていることをO・Mは知っていた。そのためH・Mから受け取ったブリの一部を分けに行ったのだ。その後帰宅すると家事をして過ごし、夕方には娘夫婦と食事を取り21時前に就寝した。

個人の性格もあるため、O・Mの社交性をすぐ一般化することは難しい。しかし彼が利用するバンヤに来る漁師は、基本的に彼と近い世代が中心であった。そして他のバンヤについて見ると、図5中の③はほとんど使用されていなかった。また町内唯一のパン屋である甘盛堂近くの②は規模が一番大きく、主な利用者もより若い、現役と見られる漁師たちであった。しかし利用者の多くが漁の合間に休憩をしに立ち寄る程度であったので回転が速く、筆者が立ち寄るたびに顔ぶれが異なっていた。このことから、若手・中堅世代の場合も交流がないわけではないが、高齢層と比較するとその頻度は低いと考えられた²⁴。こうした利用状況等を合わせてみると、高齢漁師にとって同世代と交流する機会は他世代と比較しても頻繁であると推測された。

こうした社交の頻度に加え、その範囲は漁を超えた、より私的な関係へと発展する様子も観察された。O・MはO・Yたちと漁外でも交流し、またT・Mのような完全引退した漁師とも関係は続いていた。出漁だけでなく日常的な生活動作も困難なほど衰えたT・Mのような人にとって、繋がりへの扶助的意味は特に強くなる。漁の内外に及ぶ同世代の関係はまた、漁後の時空だけでなく、出漁に必要な情報の供給源ともなっていた。こうした情報共有や相互援助は、より効率的に漁をこなす必要の増した高齢層にとって不可欠となる。

高齢漁師の協働による出漁実践の事例をもう1つ示す。次の事例は、漁場の移動があった、採貝・採藻漁に主に従事する高齢漁師らの間で観察された実践である。先にも述べたように、植生の変化により、より多く良質な藻類が採集できる漁場は沖に限定されるようになっていた。しかし沖になるほど深度は高く海流も激しくなることから、身体的に大きな負荷に耐えられない高齢世代の漁師は取り残されていた。こうした年代ごとの漁場の分離を背景に、基本的に沖合での採藻漁は若手・中堅、浜近くでの漁は高齢層によって占められていた。そのため毎日の出漁可否を決める指揮者が若手の場合²⁵、高齢漁師は不利になる。沖合での激しい漁に耐えられる漁具・漁船を持つ若手世代と異なり、高齢世代は身体的側面と漁具・漁船の側面でも無理は利かなくなっている。そこで若手世代を基準にし

22 T・Mは当時すでに90代で、O・Mも所属する老人会会長も担っていた。若い時期は漁師と運送業で家庭を支えていたようであるが、筆者が会った時には足腰が弱り、ほとんど漁に出られない状態であった。O・Mとは仲が良く、老人会の活動で体力が必要な清掃作業などでは進んで手伝いをしていた。

23 奥がO・M、手前がO・Yである。筆者も手伝いを申し出たが、不慣れだと魚を傷つけるため断られた。

24 あるいは、携帯での電話やSNSツールの活用によって連絡を取り合っている可能性もある。

25 漁の際は当日の天候に応じ開始の可否と出漁時間が定められる。一年をとおして平均的な時間の区切りを言うなら、大体は朝6時半に漁が始まり、ウニは11時、アワビは14時までの漁と決まっている。その設定時間を超えて漁をしないよう、漁協管轄で漁の指揮・監督をする人が設置される。そうした役割を持つ人が指揮者と呼ばれる。年齢制限はない。

た天候判断で出漁ができて、高齢世代にとっては無理な場合もあるからである。

採貝・採藻漁の場合、地区漁場内に植生・生息する海藻・魚介類を獲物にするため、漁獲できる獲物にも限りがある。そのため若手が指揮者となって高齢世代が出漁できないほど悪天の日に出漁されると、高齢世代の取り分も奪われてしまう可能性が高い。そこでそうした状況を避けるため、高齢層の採貝・採藻を主にする漁師たちは仲間うちから候補を推薦し、指揮者としていた。以下は指揮者となったS・Hによる語りの抜粋である。以下は指揮者となったS・Hによる語りの抜粋である。標準語訳を後につける。

標準語訳：

コンブ採りはマンケ漁、ホコ漁とがあるでしょう。(中略)マンケ漁をする人は大きな船を使うので、海が時化ていても先に出漁していく。(中略)底が見えなくても、多少の波でも、マンケ漁は関係無いんだ。…だから漁業協同組合でも、大きな船を操れる若い世代による若い世代のえこひいきがあるので、ホコ漁をする高齢漁師から指揮者が立候補すれば、高齢漁師にも好都合ということで、皆が私を推薦したのだ。O・Mさんも含め、高齢の採貝・採藻漁師の多くはホコ両者だから。皆が私に立候補してくれと。

事例9 同じ漁業協同組合でも、えこひいきがある (2016/12/1)

S・H：…あのコンブはほれ、マンケとホコ採りってあるっきゃ。(中略)マンケの方からすぐ立ってまわさ、シケでもなんでも関係ねえ。(中略)底見えなくても多少の波でも、マンケは関係ねえのさ…だとかで、あんまり同じ漁業協同組合でも(若い世代による若い世代の)えこひいきがあるつつうので、ホコ採りから(指揮者が)立てば一番良いつつうので、わいば推薦したのさ。(中略)O・Mさんとも皆ホコ採りだとかで、皆(S・Hが指揮者に)立ってけろって(後略)

語り後半にもあるように、より若い世代が有利に漁を進めることに対する悪感情は、O・Mを含めた高齢世代には広く共有されていた。角が立つのを避けるために表立った批判をする人は見られなかったが、日常でもより私的な空間である自宅の居間やお酒の席などでは、若い世代の勝手さを批判する言葉が放たれる場面が観察された。特に漁協監事を担っているO・Mは、漁協の意向決定の会議でも若い世代と対立すること、それでも先を担うのは若手という認識は漁協全体で持たれているため、たとえ高齢世代を代表していても自分が退かなくてはならないと、不本意さを滲ませながら話していた。

事例8では漁中の相互援助がより広範な関係に拡大していた。事例9では高齢世代から指揮者を出すことで世代ごとのえこひいきを回避していたように、漁中の年代的周辺化に対する、高齢漁師たちによる能動的対処が見出せる。このようにして彼らは不利な状況で結び合い、さらにその関係を基盤に漁が有利になるよう働きかけていたのだ。

ここまで高齢漁師たちの出漁実践を見た。彼らは漁中互いに協働し、出漁を少しでも有利に進めるべく周辺化状況に対処していた。そのなかで成立する同世代の紐帯は、より私

的な領域までおよび、扶助機能も有していた。そうした広範な関係性は、個々の高齢漁師たちの出漁の継続を助けていたと考えられる。

6-2 老いてなお「漁師」であること

大間の漁業においては、主要漁獲種の変化に伴う漁船・漁具のハイテク化、海水温上昇と植生の変化による漁場の移動という変化が見られた。こうした変化のなかでは漁が効率・省力化された。漁船・漁具のハイテク化は漁の負担を軽減させ、以前なら引退していた世代の漁師たちもより長期の従事が可能となっていた。しかし他方では、ブランド価値の向上と内部での差異化を志向する漁師たちの間では競合が加速しており、身体・認知能力の衰えや収益の低下といった点で競合力を落とす高齢漁師たちは周辺に置かれ、彼ら自身もまた他世代に比較して疎外的感覚を抱いていた。しかしそうした状態であっても、高齢漁師たちは情報交換や補助をし合いながら、出漁をつづけていた。以下では、出漁を継続させる高齢漁師たちの心情や動機を検討する。

漁船・漁具のハイテク化や漁場移動といった、彼らを海から押し出す外的変化に加え、彼らの身体を気遣い心配する子どもや親族の存在も、彼らを海から遠ざけ陸に引き戻す向きに作用していた。次に採貝・採藻漁を営む高齢漁師 T・K とのインタビュー会話の抜粋を事例として示す。彼は調査が行われる 2 年前に直腸ガンが見つかり、手術を経験していた。一命は取り留めたが、結局大腸を切除したため、おむつが手放せなくなった。腰も悪くし、基本的な歩行にも支障を抱えていた。こうした身体状態は彼の出漁にも影響していた。船を出し、漁場に行って漁をし、帰って来たら獲物を乾燥・裁断する。こうした基本的な動作は単独で行えているものの、「かろうじて」という様子であるようだった。特に海中から水をたくさん含んだ海藻をホコで引き上げる作業による腰への負担は以前よりかなり大きくなったと語られ、その重篤さは何も支えがない状態であれば 100m も歩けない彼の様子からも窺えた。こうした衰えの様子から、その出漁に対しては家族からも心配の声があがったり、出漁を止める声かけられたりしていた。

また、彼が主な漁をする西沿岸部の海域ではコンブがほぼ取りつくされ、調査当時も不漁続きであることが語られていた。第三者から見るともはや漁に出る必要も意味も見出し辛い状況であったが、T・K 自身は家事手伝いなども含め、頭や身体を積極的に動かすことを心掛けていた。事例 10 は、彼のそうした精力的な姿を見た筆者が、引退について考えないのかを尋ねた時の会話である。

事例 10 皆さんに迷惑かけるもん。(2016/8/2)

筆者：まだ引退とかは一切考えないんですね。

T・K：いや…

筆者：うん。

T・K：もう、そろそろ引退するべき。(中略) 皆さんに迷惑かけるもん。

心配されてるしさ。

筆者：どうして迷惑なんですか？

T・K：いや、迷惑かけるっちゅうことがさ（中略）ほら。無理すれば1回にがたっと
いってしまえば、本当に長生きするものしないでもう亡くなったら、うん、皆さ
ん迷惑かかる。救急車で行くことになったら迷惑になるべな、うん。

筆者：ああ…そう、そうなのかな。

T・K：だから、そうならねえようにほれ、うん。ああ、気づけてるんだけども。いつど
ういう風になるかの…。

この会話からは、自身の出漁が周囲に心配をかけ、そうして心配をかけること自体が迷惑だと捉えているのが分かる。またそれ以上に、漁中に倒れでもして入院ともなれば医療・介護費など経済的側面や精神的側面への負荷もおおいにかけてしまうということへの懸念も、事例で取り上げた発言の前後には聞かれた。加えて、こうした状態を踏まえて本来なら引退すべきという考えも持たれていた。

しかしそう話しながらも、T・Kの話しぶりには引退を本気で考えている様子は見受けられなかった。こうした周囲からの心配や気遣い、それをかけさせることを相手への迷惑と理解する姿勢は次の事例11に登場するI・Tの父親を含め、他の高齢漁師にも観察された。しかしやはり彼らも、そうした自覚を持ちつつ出漁を続けていた。

衰え、障害が出れば一層その身体は以前よりも動かなくなっていく。自らを海から引き離し陸に留め置こうとする状況が進むなか、自分自身もまたその状況に気後れや遠慮を感じながらも、出漁を諦めきれない。高齢漁師の心情には、おそらくこのような葛藤が存在していたと考えられる。上記のT・Kの語りは、そうした高齢漁師たちの複雑な心境を代表する事例と言える。

それでは、彼らは何故こうした葛藤を抱えながら出漁を継続するのか。調査中には、独居して自身の生活費を稼ぐ高齢漁師にも出会った²⁶。彼らは自営業者であるため、国民年金のみを受給し、不足分は子どもの仕送りや自営漁によって賄っていた²⁷。しかし息子や娘家族と同居し、必ずしも自身で稼ぐ必要はないという人も珍しくなく、また自身で「小遣い稼ぎ」あるいは「金にはならねえ」とその金銭獲得の目的を全く否定する言葉を聞くこともあった。ここから金銭獲得の手段として出漁が継続される場合は否定できないものの、高齢漁師たちが衰える身体と葛藤を抱えて海に向かう理由のすべてとも言い切れないと考える。その理由を考えるヒントを、高齢漁師の出漁を支える人々の語りから見出そうと思う。

26 過疎高齢化の進む当地に単身独居で暮らす高齢漁師たちは、中学を出るとすぐ外部への出稼ぎと地元での漁業で生計を立ててきた人々である。受給できる年金が十分でなく、出漁が貴重な生活費を稼ぐ手段となる人も見られた。漁業共済による補助もあるが、網やテグスなどの漁具の購入・修繕費や漁船を動かす燃料費に限って下りるものであり、また最終的には返済が義務付けられているため、生活費としての使用はできない。

27 山下東子は高齢の自営漁業者の就業確率が高いのは、定年のないこと、厚生年金部分がなく国民年金のみを受給することによると述べている。また大谷誠は漁業者向けに「漁業者ねんきん（月額2万円支給）」と「なぎさ年金（月額4万円支給）」が用意されており、夫婦で満額受給した場合に厚生年金に近い年金額になるものの、その加入率の低さを指摘している〔山下 2015b; 大谷 2015〕。

次に示す事例は高齢漁師の父とともに出漁するI・Tの語りである。I・Tは現在、父親と2人の乗り子とともにマグロはえ縄漁を専門に活動する中堅世代の漁師である。乗り子を雇いいれたのは今から4年前。父親が脳の病気を患い、出漁できなくなってからである。当初は父親の抜けを埋めるため雇い入れた乗り子たちであったが、現在も漁で十分に活動できなくなった父親の穴を埋めるためともに出漁している。身体を壊してからもリハビリを重ね出漁しようとする父親に対し、I・Tは心配しながらも、身体の負担にならないような作業を与えていた。その状況を見た筆者は、I・Tのそうした対応について、そこまで心配するのならどうして同行を止めないのかをI・T本人に尋ねた。事例11はそれに対するI・Tの返答である。

事例11 男なんて格好つけてもの言いたいから (2017/1/2)

I・T：…いや、(中略)時化てれば置いてくよ、普通に。かえって危ないから。こっちが気遣うから、…暖かい時だったら、まあ。行きたくないとは言わないけど…あまり無理させないようにしてる。(I・Tの父本人は)出たいけど、無理だべ。男なんて格好つけてもの言いたいから…。

この事例からは、I・Tが父親による同行の動機を「格好つけ」、男性としての格好という、社会的なあり方のためだと考え、尊重していたということが分かる。ここでI・Tの父親が求めた格好が「男性」としての格好なのか「漁師」としての格好なのかは定かではないが、調査中の観察に基づけば、おそらくいずれの意味も含んでいたと考えられる。第4章で見た「漁師」と男性ジェンダーの結びつきの、世代を超えた共有が改めて確認される。

こうした社会的なあり方を示すための高齢漁師による出漁は、当地では暗黙の下に受け入れられていた。次に示す事例12は、高齢漁師の妻による語りの抜粋である。彼女は調査の休憩に入った喫茶店で偶然相席になった女性であった。彼女に話を伺うと、その夫で高齢漁師の男性もまた、病気の身体をおして漁に出続けているという。そう教えてくれた彼女は心配を口にしながらも話しぶりは明るかった。筆者はその様子にアンバランスさを感じ、「あまり心配はいらないですか？」と尋ねた。問いかけに対する彼女の返答は次のようなものだった。

事例12 年いってても自分は漁師なんだ (2017/1/12)

女性：…心配は心配だよ。でも、うん、本人の意思でもって大丈夫って言ってるから…本人がさ、行けるあれだったら、それを止めないと思う。「行け」って感じ。やっぱりさ、根っからの漁師だして、それで死んでも本人は悔いはないでいると思う。出れないで家にいる、辛そうな姿見るよりはまし。身は二の次として…「年いってても自分は漁師なんだ」みたいな、そういう漁師魂なんでねえ？

この事例のポイントは「漁師魂」という言葉である。この言葉には「漁師であり続ける」という理想を持つことと、身体の安全は二の次としてそうした理想を追求すること、そうした高齢漁師のあり方を承認すること、という3つの意味合いが見出せる。事例11のI・Tもまた高齢漁師である父親の出漁について、「男なんて格好つけてもの言いたいから」と揶揄しつつも、そのあり方を認めていたからこそ父親の同行を認めていたのだ。

老いてなお漁師として、そして男性としての理想を求めたからこそ、衰える自身の身体や環境への葛藤を抱くなかでも、高齢漁師たちは海へと向かい続けていた。

7 結論

最後に考察と結論を示す。まず本稿の目的を振り返ると、これまでジェンダー意識とは隔絶された時期と見なされてきた高齢期を、高齢漁師のジェンダー意識の実態解明を通して再考することが1つの目的であった。2つ目の目的は、漁民社会における現代の文脈を踏まえつつ、老年を取りまく環境はいかに変化し、また老年者自身はその状況をどう生きているかの詳細を報告し、その作業を通して経済・社会環境の面において外部の影響を受けた一漁民社会における変化を、年代的な立場の違いに注意しつつ検討することであった。

次に全体の構成に則して、本論における議論を振り返る。第1章では民俗学、第2章では人類学に則して、老年研究および漁民社会研究を検討し、漁民社会の老年がいかに論じられてきたかを整理・検討した。第3章では、調査地となった大間と地区漁業の内容・現状を確認した。第4章では、大間において漁民的職能が男性ジェンダーと結ばれていることを、女性ジェンダーとの対比・相関から示した。そして、漁民的職能と結ばれた男性ジェンダーが、若手から高齢の広い世代に共有されていることを、事例を交えて示した。第5章では90年代以降にマグロが主要漁獲種となったことに伴う漁船・漁具のハイテク化、海水温の上昇による植生の変化と磯漁場の移動に着目して、当地における近代的変化を整理した。そしてこうした変化が漁師間の競争を加速させたことを指摘した上で、省力化・効率化によって以前より漁業に従事できる期間が延びたものの、競争力を落としているため高齢漁師たちは周辺化されていることを示した。第6章では、そのような周辺化に遭いながらも、同じ高齢世代の漁師同士で情報交換や漁の補助をし合い共同集団を作り出していることを指摘した。その上で、高齢漁師の出漁継続の背景には「老いても漁師として、男性としてありたい」というジェンダー意識を保持する意思があることを論じた。

1つ目の目的については、第3章の調査地概要から第6章の高齢漁師の出漁実践とその動機の記述のなかで検討してきた。90年代以降の漁船・漁具のハイテク化と漁場の移動という近代的変化のなかで高齢漁師たちの従事可能な期間は延びたものの、他の世代に対して競争力を落とし、周辺化されていた。また加齢に伴って衰える身体で出漁を続ける高齢漁師を心配する家族や親族の存在も、高齢漁師たちを海から引き離すよう作用していた。そうした状況では高齢漁師たち自身も、周囲に心配をかけながらの出漁に対して申し訳なさを感じていたが、一方ではどうしてもやめきれない思いを抱え、葛藤のなかで出漁

を続けていた。高齢漁師たちは高齢期にあっても男性ジェンダーへの意識を明らかに保ち、出漁していた。大間で観察された高齢漁師たちのあり方は、ジェンダー意識から隔絶された時期としての高齢期という、これまでの研究に通底する認識と一致しない。高齢男性はジェンダー意識を持つ存在であり、高齢期にそうしたジェンダー意識を維持することは、個人が望ましい加齢を経験する上で重要な要素になり得る。

しかし高齢漁師のジェンダー意識への拘りばかりが、彼らの出漁実践の動機であるとも言いきれない。合わせて述べてきたように、高齢漁師たちのなかには受給できる年金額が少ないので自活のためやむを得ず出漁する人もいれば、子ども家族に扶養され必ずしも自活する必要がないなかで「小遣い稼ぎ」として出漁を続ける人も存在した。つまり、金銭獲得を目的としている人や、惰性あるいは生き甲斐として出漁している人もおり、本稿で焦点をあてたジェンダー意識への拘りから出漁を継続させる漁師たちは、あくまでそのような多様な動機を持つ人々の一部である。

2つ目の目的については、第5章の大間漁業における近代的变化と第6章の記述・分析のなかで検討してきた。マグロが大間の主要漁獲種となって以降、大間は「マグロの町」として全国的に知られるようになっていく。2007年には「大間まぐろ」のブランドが成立し、そうしたブランド価値の向上と他の漁師との内部での差異化が求められ、漁の省力化・効率化が進んだ。マグロ人気による大間マグロ漁のブランド化はもともと希少な高級食材であるクロマグロの人気を高め、それに応じてマグロ漁師の収益も向上した。さらに、その姿がメディアに取り上げられマグロ漁師自体もイメージアップし、マグロ漁やマグロ漁師にまつわる一攫千金の華やかなイメージはマグロ漁師を志す人々を生み、過疎高齢化が進む地区漁業への新規参入者や後継者は少数ではあるものの、毎年絶えない。

全国的に見れば、漁業を主生業とする地方の多くは過疎高齢化が深刻化している。そうしたなか大間はマグロによって漁業だけでなく、町自体の振興も可能となっていた。漁師を選択する人は年を追って減少しているものの、一攫千金に憧れる人々を惹きつけるマグロ漁の魅力は、衰退する地区漁業を支えていると言える。このようにマグロを中心とした近代的变化は、地区漁業を含め町全体に活気を生んだ。

しかし年を追って全体の従事者は減少しており、過疎高齢化と従事者不足による高齢従事者の基幹化は、確実に進んでいる。マグロの主要生産種化に伴う漁船・漁具のハイテク化はただ漁を効率的にするだけでなく、漁中の身体的負担を軽くしたことから、基幹労働力となる高齢漁師たちの従事期間を拡大させた。しかし同時に競合も加速したため、そうした近代的变化に対応できる若手・中堅の世代とは異なり、高齢世代は周辺の立場で変化を経験していた。高齢漁師たちはそのなかで他世代に対して疎外感覚を経験していたものの、それまでと比べると格段に身体的負荷が軽減した漁環境で出漁し、同世代間の共同体を作りあげてその継続を支え合っていた。

漁船・漁具のハイテク化や漁場の移動によって、高齢世代とより若い世代との関係は変わった。その変化は高齢漁師の漁中における境遇と疎外感を共有する高齢漁師同士の協働へと通じた。こうした点をまとめると、大間における漁業の近代的变化は、高齢世代にとって、長期の出漁の継続と年代的な疎外、同世代との協働の機会をもたらしたと言え

る。漁船・漁具のハイテク化や漁場移動にも対応でき、その恩恵をただ受け取ることができ若手・中堅世代の経験と比較すると、近代的变化の経験には明らかな世代間の相違があると考えられた。

世界的に高齢化・長命化が進み、高齢者の社会的役割や立場は変化している。本稿で扱った大間というひとつの漁師町でも、高齢漁師の立場・役割は明らかに変化していた。今後の漁民社会を取りまく社会的側面・経済的側面・文化的側面を捉える上では、従来ならば引退しており研究上の射程から外されてきたであろう高齢世代の経験も含めて見ていく必要がある。

<参考文献>

- 飯島吉晴・宮前耕史・関沢まゆみ 2009 『日本の民俗 8——成長と人生』吉川弘文館。
- 大谷誠 2015 「高齢漁業者のライフコース」山下東子編『漁業者高齢化と十年後の漁村』北斗書房、pp.73-91。
- 大間漁協 1990-2016 『業務報告書』大間漁協。
- 大間町 1997 『大間町史』大間町。
- 2016 『平成 28 年度版大間町まち・ひと・しごと創生人口ビジョン』。
- 折口信夫 1975 (1928) 『折口信夫全集 2』中央公論社。
- 栗原彬 1986 「〈老い〉と〈老いる〉のドラマトウロジー」伊藤光晴他編『老いの発見 (1) 老いの人類史』岩波書店、pp.11-48。
- 下田直樹 2015 「高齢者就業の実態と社会保障政策の課題——漁業者の高齢化問題を考える視座の設定」山下東子編『漁業者高齢化と十年後の漁村』北斗書房、pp.137-154。
- 関沢まゆみ 2006 「日本の老いの文化——民俗学の視点から」『家族看護学研究』11(3): 121-124。
- 大工原秀子 1979 『老年期の性』ミネルヴァ書房。
- 1991 『性抜きに老後は語れない——続・老年期の性』ミネルヴァ書房。
- 高桑史子 2004 『スリランカ海村の女性たち—文化人類学的研究』八千代出版。
- 高桑守史 1989 「海の世界」鳥越皓之編『民俗学を学ぶ人のために』世界思想社。
- 1994 『日本漁民社会論考——民俗学的研究』未来社。
- 中野泰 2001 「漁師根性とナグサミ——小舟漁師にみる老いの現実とその受けとめ方」『国立歴史民俗博物館研究報告』91: pp.361-378。
- 2010 「民俗学における『漁業民俗』の研究動向とその課題」『神奈川大学国際常民文化研究機構年報』1: pp.57-74。
- 三田牧 2015 『海を読み、魚を語る—沖縄県糸満における海の記憶の民族誌』コモンズ。
- 宮本常一 1967 『宮本常一著作集第 20 巻 海の民』未来社。
- 1984 『忘れられた日本人』岩波書店。
- 2015 『海に生きる人びと』河出書房新社。
- 柳田國男 1990 (1931) 『柳田國男全集 13』ちくま文庫。
- 山下東子編 2015a 『漁業者高齢化と十年後の漁村』北斗書房。

——— 2015b、「縮小と高齢化に向かう日本漁業」山下東子編『漁業者高齢化と十年後の漁村』北斗書房、pp.1-17。

Hori, Hikari 2011 Aging, Gender, and Sexuality in Japanese Popular Cultural Discourse: Pornographer Sachi Hamano and Her Rebellious Film Lily Festival (Yurisai). In Yoshiko Matsumoto ed. *Faces of Aging: The Lived Experiences of the Elderly in Japan.*, Stanford, California: Stanford University Press, pp.109-134.

Jackson, David 2016 *Exploring Aging Masculinities: The Body, Sexuality and Social Lives.* England: Palgrave Macmillan.

Moore, Katrina L. 2015 Sexuality and Aging in East Asia” In Mark McLelland and Vera Mackie eds. *Routledge Handbook of Sexuality Studies in East Asia.* New York: Routledge, pp.372-384.

Challenging Old Age as “Non-Gendered Age”: Researching Elderly Fishermen’s Fishing Practice in Ooma, Aomori

Arisa SHIMADA

Keywords: age, aging, old age, gender, labor, and work

This paper has two purposes. The first is to rethink old age as a non-gendered and asexual age, from the perspective of Gender studies in the analysis of fishing practice, and the social relationships of elderly fishermen(over 60 or 65) in Ooma, Aomori. The second is to present the perspectives of the elderly as a new way of understanding the social life of fishing people in global aging era.

In previous studies of Japanese ethnology, the elderly of fishing societies are mentioned in studies of traditional customs like seniority, respect-for-the-aged, and so on, or in idealistic studies dealing the spiritual power of elderly people coming from their peripheral position in fishing societies. These previous studies, however, do not take into account contemporary appraisals of traditional customs, and miss the realities of old age for people currently living in fishing societies which are undergoing various social changes.

This paper focuses on the experience of gender among the elderly in order to understand the reality of old age in a fishing society. In previous gerontological studies of old age, and aging from various discipline’s viewpoint, gender or sexuality of the aged has been treated as taboo and the

elderly have been regarded as “non-gendered” or “non-sexual” people. Particularly, the lives of elderly men have not received enough examination and they have been subsequently regarded as “non-gendered people” [Hori 2011; Jackson 2016]. David Jackson has challenged the idea that elderly men are non-gendered people by describing the life of elderly working class men in British society. He examines their struggle between idealistic gender models and the realities of their declining bodies [Jackson 2016].

This paper presents the social status and social role of the aged in a fishing society, and analyses their thoughts or feelings which challenge the idea that elderly men are non-gendered people, through an exploration of their fishing practice and hard situations that discourage them from going fishing.